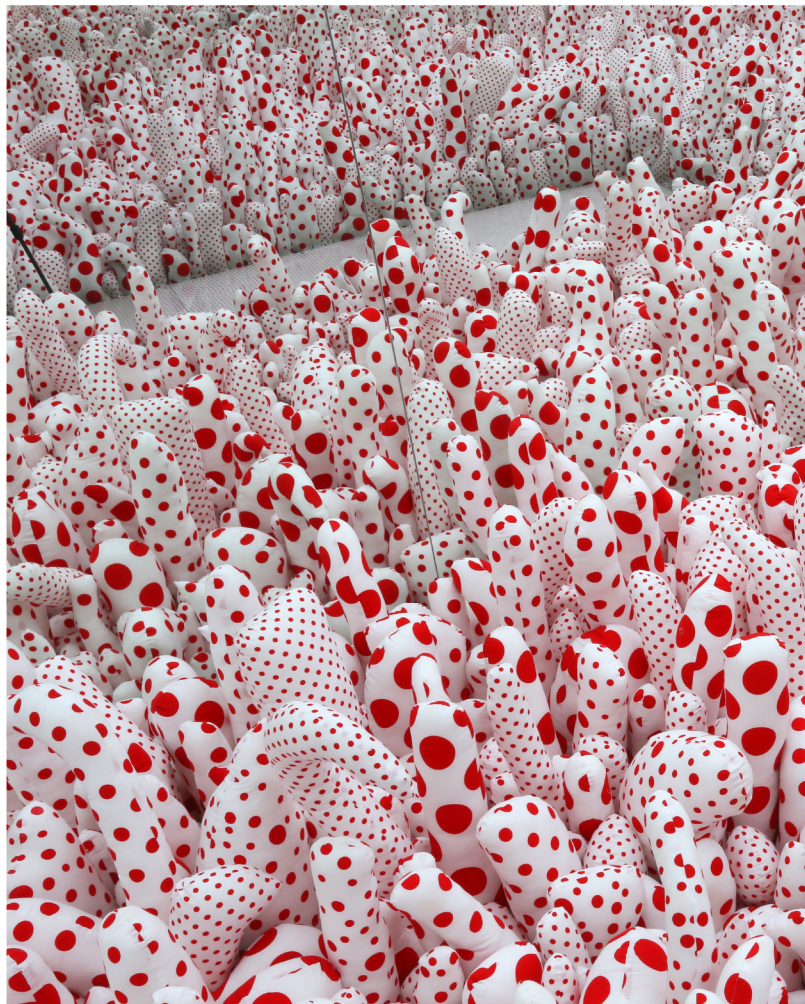


草間彌生

無限の鏡の間-ファルスの原野(または フロアーショー)

1965年 / 2013年



Yayoi Kusama, *Infinite Mirror Room-Phalli's Field (or Floor Show)*, [1965/2013], © YAYOI KUSAMA. Courtesy of Ota Fine Arts.

ESPACE
LOUIS
VUITTON
OSAKA

FONDATION LOUIS VUITTON
LA COLLECTION

#EspaceLV #CollectionFLV #FondationLouisVuitton

草間彌生

無限の鏡の間-ファルスの原野(または フロアーショー)

1965年 / 2013年

詰めもの入り縫製布、木製パネル、鏡

250 x 455 x 455 cm

Courtesy of the Fondation Louis Vuitton, Paris

1965年、アメリカ、ニューヨークのカステラーニ・ギャラリーで、草間彌生は《ファルスの原野》を発表しました。これは今なお続く長期シリーズ「無限の鏡の間」の最初の作品です。ここで草間は最初期のハプニングの1つを即興で創作し、自らの身体、そして後に観客をも巻き込んだ数々のパフォーマンス作品への道を開きました。赤いレオタード姿の草間が《ファルスの原野》に群生する柔らかな男根の中で大の字で横たわる写真はあまりにも有名なイメージですが、これらは1回限りの出来事であったハプニングを想起させると同時に、彼女が1人のアーティストとして国際的なアートシーンで地位を確立すべく展開した大々的なメディア・キャンペーンでした。

鏡張りの壁で囲まれた環境では、文字通りアーティストの象徴的なモチーフが映し出されています。水玉、色鮮やかなきらめく光が空間を侵食し、一面に広がる南瓜や抽象的かつ示唆的な形状の突起物を覆い尽くします。幻想的な空間の中で無限に映し出される自分の姿に直面した観客は、強烈な感覚体験に身を置くことになります。このような、モチーフに埋め尽くされた空間への没入体験は、作家が幼少期から経験し悩まされてきた幻覚を再現しています。草間が幻覚を見はじめたのはまだ10歳の頃でした。屋外で絵を描いていた時にはじまり、次第には食卓のテーブルクロスの赤い花模様が部屋中に拡散し、やがて家具や壁を侵食し、自身が完全に飲み込まれる幻覚を見るようになります。以来、これらの幻覚や幻聴は、彼女の作品の主題となるだけでなく、創作の原動力となっていました。

草間は自身を苦しめてきた数多の恐怖症、とりわけセックスと食に対する恐怖感を払拭する手段として芸術を用いています。彼女は自伝で次のように語ります。

「一番はじめてのソフト・スカルプチュアがどうしてファルス、つまり男根の形をしたものになったかという、それは私がセックスが汚いという恐怖感を持っていたからなのだ。(中略)恐怖の対象となるフォルムを、何千、何万と毎日作りつづけることによって、恐怖を克服していく。つまり、自己療法としての制作であり、私はそれを『サイコソマティックアート』と名付けた」。草間は自身の恐怖の元凶であるものを何百と融合し、それらが作り出す環境に身を置くことで、恐怖要素を取除き、身近で、愉快でさえあるオブジェへと昇華させます。

《ファルスの原野》を制作した当時、草間はメディアで高い注目を集めたにも関わらず、芸術で生計を立てることに苦心していました。女性アーティストであり、外国人であるという彼女の立ち位置は、当時のアメリカ美術市場において決して有利なものではありませんでした。今日、「無限の鏡の間」でひとときを過ごすために世界中で何千もの人々が列をなしているという事実は、1980年代になってようやく草間がアーティストとしての地位を確立したことの反映であり、むしろ彼女を当初認知しなかった世の中への復讐のようにも感じられます。

アーティストについて

草間彌生は1929年、長野県松本市に生まれました。現在、東京を拠点に活動しています。

子供の頃から絵を描き、文章も書いていた草間は、両方の分野で賞を受賞していました。家族の反対を押し切って美術を学び、日本画の技法を身に付けると、紙から木材、布にいたるまで、さまざまな素材を使った独自の表現を模索しはじめます。1957年、当初はフランス移住を考えていた彼女でしたが、アメリカ人アーティストジョージア・オキーフとの文通を経てアメリカ行きを決意。シアトルに降り立った後、最終的にニューヨークに定住し、アート・スチューデント・リーグで学んでいます。彼女がアメリカ前衛芸術界の重要人物たちと接点を持つようになるのにそれほど時間はかかりませんでした。アンディ・ウォーホルの「ファクトリー」は、クレス・オルデンバーグのスタジオと同じ建物にあった草間のスタジオのすぐ近くに位置していました。近い環境にいた2人は草間のアイディアを借用し、ウォーホルはスクリーン印刷の壁紙を、オルデンバーグはソフト・スカルプチャーというコンセプトを自らの作品に応用していました。ところが、この借用はいずれも彼女に無断で行われていました。ニューヨークの活気あるアートシーンの中心にあって、メディアからも注目を集めていたにもかかわらず、女性かつ外国人という立場にあった草間にとって、アートで生計を立てることは困難を極めました。1973年、東京の病院での手術のため帰国した草間は、その後日本に定住。激しい幻覚に悩まされた彼女は、1977年に東京の精神科病院への入院を自ら希望し、現在もそこを拠点に制作活動をしています。

絵画、彫刻、インスタレーション、文学、パフォーマンス、ファッションと幅広い分野で活動する草間は、日々実践する無意識的で瞑想的な手法から、水玉、網、花という彼女のトレードマークとなるモチーフを生み出しています。アメリカ到着直後に制作された初期の抽象的な「無限の網」は、瞬く間に記念碑的な大きさにまで成長し、やがてこのモチーフはスタジオの壁やギャラリーを侵食していきました。さらには彼女の衣服や街で拾い集めた家具、日用品にまで広がり、こうした品々を増殖する布の突起で覆ったものが「集積」シリーズです。このシリーズは、エヴァ・ヘスらがその後間もなく展開する同様の表現手法を多くの点で先取りするものでした。家父長制社会、資本主義、ベトナム戦争への抗議という大きな文脈の中、1960年代

後半の草間によるハプニングやパフォーマンスは政治的な色彩を強めていきます。日本に戻った草間は当初、家父長制的で保守的な日本社会への疑問を投げかけていましたが、やがて水玉と無限の反復という形での哲学の発展に回帰していきました。

草間は1952年、日本で初めて個展を開催しました。日本とアメリカで数多くの展覧会を重ね、1966年の第33回ヴェネツィア・ビエンナーレでは無許可で展示を行いました。1993年にはこの由緒ある国際的な舞台で日本代表として正式に招待を受け、ついに世界的な評価が確立されました。以降、彼女の作品は世界各地の多くの展覧会で取上げられており、1998年のニューヨーク近代美術館を皮切りに、1999年の東京都現代美術館、2011年-2012年のポンピドゥー・センター(パリ)およびテート・モダン(ロンドン)、2021年のグロピウス・バウ(ベルリン)、2022年のM+(香港)、2024年のビクトリア国立美術館(メルボルン)など、主要な美術館での展覧会が続いています。2017年には草間彌生美術館が東京に開館し、草間とその作品に特化した美術館として、多彩な企画展を通じて来館者が作品と出逢い深く向き合うことのできる場を創出し続けています。

フォンダシオン ルイ・ヴィトンについて

フォンダシオン ルイ・ヴィトンは現代アートとアーティスト、そしてそれらのインスピレーションの源となった重要な20世紀の作品に特化した芸術機関です。公益を担うフォンダシオンが所蔵するコレクションと主催する展覧会を通じ、幅広い多くの人々に興味を持っていただくことを目指しています。カナダ系アメリカ人の建築家フランク・ゲーリーが手掛けたこの壮大な建物は、既に21世紀を代表する建築物と捉えられており、芸術の発展に目を向けたフォンダシオンの独創的な取組みを体現しています。2014年10月の開館以来、1000万人を超える来館者をフランス、そして世界各地から迎えてきました。

フォンダシオン ルイ・ヴィトンは、本機関にて実施される企画のみならず、他の財団や美術館を含む、民間および公共の施設や機関との連携においても、国際的な取組みを積極的に展開してきました。とりわけモスクワのプーシキン美術館とサンクトペテルブルクのエルミタージュ美術館(2016年の「Icons of Modern Art: The Shchukin Collection」展、2021年の「The Morozov Collection」展)やニューヨーク近代美術館(「Being Modern: MoMA in Paris」展)、ロンドンのコートールド美術研究所(「The Courtauld Collection. A Vision for Impressionism」展)などが挙げられます。また、フォンダシオンは、東京、ミュンヘン、ヴェネツィア、北京、ソウル、大阪に設けられたエスパス ルイ・ヴィトンにて開催される所蔵コレクションの展示を目的とした「Hors-les-murs(壁を越えて)」プログラムのアーティストック・ディレクションを担っています。これらのスペースで開催される展覧会は無料で公開され、関連するさまざまな文化的コミュニケーションを通じてその活動をご紹介します。